

## 中耳ファイバースコープ

東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科准教授

小島 博己

(聞き手 林田康男)

---

中耳ファイバースコープの保険適用と正しい適応疾患についてご教示ください。中耳ファイバースコープにて鼓膜所見を調べていますが、やたらと減点されます。「滲出性中耳炎」「耳管狭窄症」「急性外耳炎」等、耳内に異常のある診断をつけても削除されます。唯一「中耳炎」または「中耳炎の疑い」だけ認められるようです。

<東京都開業医>

---

**林田** 小島先生、ご質問は、中耳ファイバースコープの保険適用と正しい適応疾患について教えてくださいということです。

この先生は、実際に中耳ファイバースコープを使っておられるようですが、まず中耳ファイバースコープの適応についてお話しいただけますか。

**小島** 中耳ファイバースコープというのは、本来は鼓膜に穴のあいている症例、いわゆる慢性中耳炎で、その鼓膜の穴、穿孔を通じて、鼓室内、耳小骨ですとか、あるいは鼓室内の粘膜、こういったものを観察する目的で設定されたものなのです。

確かにこの内視鏡を用いますと、非

常に視野角が広くて、全体を見ることができず、かなり近づけて見ますと、詳細な検討ができます。また、記録をすることも可能ですし、モニター画面を見せて患者さんに説明することもできますから、非常にいい検査方法だろうと思います。さらに、以前と比較してよくなった、あるいは悪くなったということも説明できるので、広く使われている検査法です。

**林田** 今のお話は、慢性中耳炎ということだったのですが、ほかには病名としては何がありますか。

**小島** 真珠腫という病気がありますけれども、これも広く含めると慢性中耳炎の一種です。鼓室の中の鼓膜に陥

凹、いわゆるへこみがあって、そこがどんどん広がって行って、耳垢などがたまっていくという病気なのですが、その陥凹の奥がなかなかのぞけない。こういう場合に内視鏡を入れて、その奥を見るということは保険上もおそらく問題ないだろうと考えます。

**林田** そうしますと、最初にこの先生が請求しています滲出性の中耳炎、あるいは耳管狭窄症、急性外耳炎というのは、一般的にはどういうものを使って検査をするのでしょうか。

**小島** いわゆる古くからあります耳鏡です。昔は額帯鏡を用いて、反射する光で裸眼で見ていたのですが、これだと、今の時代はほとんど役に立たないだろうと思うのです。その次に拡大耳鏡がありまして、充電式の電池がついていて、レンズがあって拡大する。これはかなり有用です。さらに、顕微鏡ですね。耳鏡を持って、顕微鏡を当てて見る。こういうものが一般的だろうと思います。

**林田** そうしますと、例えば拡大耳鏡というと、これは保険請求としては個別であるのでしょうか。

**小島** いえ、ありません。顕微鏡もありません。

**林田** ファイバースコープを使うことは非常に便利で効率もいいということになりますと、中耳ファイバースコープという名前は、なぜ中耳という名前がついたのでしょうか。

**小島** そのいきさつは私にはわかりませんが、先ほど申し上げましたように、従来は耳鏡で見ていた。顕微鏡で見るにしても、拡大耳鏡で見るにしても、真つすぐしか見られないのです。穴があいている鼓膜の裏側を見るには限界がありました。ですから、鼓膜穿孔のさらに奥を見たいという意味で中耳のファイバースコープという名前が決まったのだらうと思います。

ただ、時代背景から、昨今ではAV機器の発達も著しいですし、電子カルテもあります。さらに、証拠を残すという意味でも、写真、画像を撮影して保存することは非常に大切だろうと思いますので、どんどん使われる機会は増えていくということになってきているのではないのでしょうか。

**林田** 例えば、処置をするときに、鼓膜のところにチューブを入れたり、ドレナージを入れたりする。そのような細かい操作をするときに、こういうファイバースコープの監視下でもって行うことのほうが、非常に意味合いがあるような気がするのですけれども。

**小島** 処置に関していいますと、顕微鏡を使うのが一般的です。というのは、顕微鏡を使いますと、両手操作ができるということになります。ただ、外耳道が狭いとか、そういうような場合は内視鏡でチューブを入れることも実際に行われています。

**林田** 実際に、これは保険適用の問

題から外れてお話しさせていただきたいのですが、この中耳ファイバースコープがいわゆる外耳道も含めて有用であるというお話をいただけますか。先ほど少しお話しいただきましたけれども。

**小島** 重なるところもありますけれども、非常に視野角が広くて詳細に見られますから、外耳道から鼓膜までのかなり詳細な観察ができるのです。ですから、それを写真に撮る、あるいは記録に残すということをお勧めします。

**林田** 実際に中耳ファイバースコープの径はどのくらいですか。

**小島** だいたい一般的に使われているのは2.7mmぐらいの直径で、長さが6cmぐらいの硬性鏡を使うことが多いと思います。あと、鼻用のファイバースコープで直径が4mmぐらいのものがあるのですが、それも使うことが多いのです。口径が大きいほうが画像がきれいに見えるということになります。

**林田** こういうふうにはいろいろなスコープを作ってくると、スコープのグレードアップといいたいでしょうか、そういうものは、実際に使われている先生方からごらんになって、ファイバースコープの精度はどういうところをもう少し上げてもらいたいのか、そういう要望は何かありますか。

**小島** 現在のものでもかなりファイバースコープ自体は完成されたものに近いだろうと思います。ただ、それを

ポータブルで使えるものですか、より明るく見えるものとか、こういうものをもっとコンパクトにして、完全に持ち運びができ、往診や病棟などで使えるようなものができる、かなり有用だろうと思います。

**林田** 私も専門外なのでいろいろ調べてきたのですが、外耳道の中に異物が入りますね。そうしますと、保険の点数では、簡単なものと複雑なものの2つに分かれているのですが、簡単なものは耳鏡などで簡単に取れるような気がいたします。けれども、複雑なものとなると、先ほどいわれた顕微鏡とか、それからこういうスコープというものが効果を発揮するような気がするのですけれども、これはいかがでしょうか。

**小島** おっしゃるとおりだと思います。特に、鼓膜に異物がくっついていようなときですか、異物で、虫なども多いのですけれども、そういうものを雑にとると、鼓膜に穴があいてしまえますので、鼓膜との関係をよく見ながら、鼓膜を傷つけないように取るということが大切です。それには顕微鏡なり内視鏡なり、拡大して、確実な視野のもとにとることが大切だろうと思います。

**林田** 中耳ファイバースコープの適用拡大といいたいでしょうか、いわゆる医療保険のうえで適用拡大の要素というのはだいぶありそうな気がするのです

が、学会として少し適応を広げようとか、あるいはもう少し処置の内容によっては中耳ファイバースコープの点数、これも調べてまいりましたら、10年以上、同じ点数なのですね。学会としてこれを変えようとか、そういう動きはあるのでしょうか。

**小島** 私が申し上げる立場ではないので、今の時点では適用に従っていたけどということしか言えないのですけれども、先ほどから申し上げていますように、中耳ファイバースコープはかなり有用な検査だということと、時代背景が、これを設定したときと今とではだいぶ違いますので、そういう意味で点数アップを考慮していただければと、一耳鼻科医として思います。

**林田** 最後になりますが、中耳ファイバースコープを使用したときの注意事項、この辺をまとめていただけますか。

**小島** 特に、お子さんですと、不用意に動いてしまったときに、外耳道なり鼓膜を損傷してしまうおそれがあるので、必ず片手で持って、片手の指を

患者さんの頭とか顔につけて固定する。少しでも動く気配があるときはすぐ引き抜くということが一番大切だろうと思います。また、入れるときも、ちゃんとモニター画面を見ながら、外耳道が曲がっている方も多いですから、外耳道の曲がりに合わせて、そっと入れていくということが大切だと思います。

**林田** 中耳ファイバースコープへの要望、こういうことがこうなるといいなというのは何かありますか。

**小島** いろいろ見ながら処置ができるということで、鉗子もそうなのですけれども、いい固定器具ですとか、どうしても片手操作になってしまいますので、その操作性をよくして、両手で操作できるとか、そういうことができると、今後もっと発展するのではないかと思います。

**林田** 洗浄機能を持ったり、吸引、それから両手操作処置ができる、そういうチャンネルがつくと、さらにいいようになるということですね。

**小島** 可能性はあると思います。

**林田** ありがとうございます。